



第十四代 表千家家元千宗左宗匠 宗像大社 献茶祭

神具・装束 株式会社 結城式場用品 本社 福岡市博多区東公園二二二(一)番



黄金色の稲穂が頭を垂れ、木立の緑も色づき、秋の深まりをいよいよ感じさせた十月十七日、当大社秋の恒例神事献茶祭が、第十四代表千家々元而妙斎千宗左宗匠の奉仕により厳粛に肅行された。

宗像大社 献茶祭

秋晴れの好天に恵まれた当日、早朝より和服姿の茶道関係者が続々と参集、宗匠の御点前を實際に拝見できるのはこの機会において他にはないため、その披露を今や遅しと待ちわびていた。宗匠、齋前庭より齋主山田祐宣以下宗匠、勅使庭前庭より千宗左宗匠、介添の高弟、出光興産株式会社

会長出光昭介氏外関係者が参進、祝舎にて合流、修禊の後拝殿へ進み所定の座に着座、咳一つない張り詰めた空気が漂う中、祭典が執り行われた。祭典は、齋主祝詞奏上に続いて、拝殿に弁備された風炉の前で家元が献茶の儀を執り行い、始祖千利休より四百余年、不審庵表千家に脈々と受け継がれた「和敬静寂・清浄礼和」の茶道の本義に則り、優雅な御点前を披露、濃茶、薄茶の二服が点てられ、神前に奉納された。

次いで齋主、家元、出光宗匠、同門会代表が各々玉串を捧げて拝礼、約一時間に及ぶ献茶祭は滞り無く終了、家元の御点前を凝視した参列者の、祭員、家元が退出されるとその緊張が解け吐息がもれていた。この表千家々元奉仕による献茶祭は、昭和二十七年当時の宗像大社復興期成会会長出光佐三翁の御尽力により、伊勢の皇大神宮神嘗祭当日にあたる十月十七日の慶日に、第十三代表千家々元即中齋千宗左宗匠奉仕のもと奉納されて以来、今日迄九州では唯一定期的に執り行われており、斯界の人々にとっては、副席への参加も含め茶道の奥義を習得する絶好の機会でもある。それだけに県内からも、館に設けられた出光席、齋殿に設けられた同門会席の副席へ交互に参席、茶席に掲げられた掛軸や茶道具の溢れ、終日賑わった。

記 十一月十五日(金曜日) 祭典 午前六時 お座 午前六時三〇分 午前九時 一、場所 祭典 本殿 二、お座料(二名分) 金五円

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。この神事は、宮中に於て陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のもので、この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分かちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特に古事記と呼ばれる、九百年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあるゲバサモという海藻をお供えして、お座を催すが古来からのしきたりです。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

◆神道は、吾日本人が古来からもっている宗教である。今日も私達の日常生活の中に、「風俗」「習慣」として、しっかりと溶け込み、身にしみ込んでいく。「神道」は日本の民族宗教でもあると言える。「民俗学・年中行事」等と文献を見るに、「神道」の教えぬきには考えられないといつても過言ではない。真に「神道」に対する理解をもっていないのが現実である。

◆季節が移り変われば、人々の心は年々、毎年毎年同じ様に営行事を繰り返している。古来からこのことを「年中行事」と言い、公的・私的の別なく、年々、年々定めて行い以上は「年中行事」とは違いない。今日日本に於ける「年中行事」なるものは、まことに多種多様な年中行事で何から何まで行われていない日はないといつてもよい。

◆「神道」についての意識を高め「神道」とつながりのある「年中行事」を進め、残して行かなくては、日本は伝統文化を無しくかねない。文化の土台ともなる「神道」が無くなってしまうたらどうなるだろう。日本であって日本でなくしてしまいかねない。しかし、時にはある部分が拡大され、変容して形成した神饌の種類や、季節により、地方によりそれぞれ特徴ある伝承をもった行事となっている。底には、「神道」、日本の伝統文化が流れている。

「清くして高き」歴史観のために

これまで、筆者は、氏のいはれる「確乎たる学術の意味に於いて」をどう理解するかに悩んできた。といふのも、明らかに「東京裁判史観」の批判・克服を旨として書かれたと思はれる教多の著書、書籍によって、筆者が教へられる見地も存在するにも拘らず、それが「確乎たる学術の意味に於いて」執筆されたものなのか、それとも「防衛を目的とする以上は、自らの側面からの主張を力説し、不利には、な

るべく避けるか、そのほか複雑な制約の条件と鉄則がある。「神国」の心といふ故郷津彦先生流の冷徹な認識を踏まへた上での論考なのか、有体について判断に苦しんでるからである。「因に津彦先生は啓蒙書ではあるが、「確乎たる学術の意味に於いて」も充分批判に耐へるやうにして「国家神道」とは何だったのか、執筆された。

「東京裁判史観」を克服し、自己の信念を、学術的に批判に耐へうる新たな「史観」を構築してある中堅・青年神職が全国に多数存在してあることを肌で感じ、彼らと共に悩み、考へ、勉強することの必要性を改めて痛感した。そしてそれが、戦後の「神道の社会的防衛者」たることを身を以て任じた津彦先生をはじめとする先人たちの生き方でもあった、としみじみ懐かしく想ふ。

願はくは全国の青年神職諸氏が、本欄で紹介した小堀、津津両氏の論考を精読され、自信に満ちた正しい史観構築の一里塚とされんことを。(神社新報)

河東 薄 かねる 夏の間に少し肥りて空を舞う 柳に少女は新装期まつ 空を舞に興味を持つた 心身共にバランスのとれた少女のさまが生き生きと描かれ、その少女をめぐる 明るい一家族が想像される。ほへえ、いい作品である。

今から四年前、小堀桂一郎氏は本欄に「東京裁判史観 克服の王道」を寄稿された(第二一五号)。そして同じ紙面には「東京裁判弁護資料」刊行に向けての会の結成とその活動の目的である資料集の刊行が平成七年であることが報じられていた。

それから四年後の平成七年、予告通り、小堀氏が代表となつて編集された膨大な労作「東京裁判却下未提出弁護資料集 全八巻(国書刊行会)」が刊行され、さらには同じ小堀氏編によつて、その抜粋版たる「東京裁判 日本弁明」(講談社学術文庫)も出版された。運時ながら小堀氏をはじめ、編集・刊行に従事された方々に衷心より敬意を表すと共に、その成果が一人でも多くの国民に共有され、「東京裁判史観」すなわち日本悪玉論が払拭される日の一日も早い到来を願はずはあられない。

だがこのことが「言ふは易く行ふは難し」であり、一朝一夕に成就できるものでないことは、小堀氏が正當にも「この資料集の刊行が成就した時は、東京裁判史観を初めて「公平な」立場から検討し直す視点が確立されるだろう。その時、「東京裁判史観」を確する学術的な意味に於いて克服する事業も真に「清くして高き」として進めたい」と前記本欄で結んでをられることからも知られよう。

しかしながら、筆者の抱くかかる悩みは何も筆者のもののみではなからう。多くの中堅・青年神職が、日夜氏子・崇敬者や近接し、「先の大戦」や戦前との時代、近代の日本及び日本人がおこなってきたこと、等々及び語り合つてゐる。そんな中で氏子・崇敬者の素朴な、あるいは意地悪な質問に真剣に答へ、答へあぐねてゐる。彼ら其口舌に、はたして社人は「東京裁判史

観」を克服しようのだから「清くして高きもの」と濁りて低きものと相錯し、衝突しながら流れていった「華津彦」明治維新と東洋の解放)の「濁りて低きもの」を直視し、それを踏まへた上でなほかつ「清くして高きもの」を明らかに、堂々と説くことこそ、社人が進むべき「東京裁判史観」克服の「王道」ではないだろうか、と。今、筆者は「王道」を歩む姿を小堀氏に見てゐる。かの統帥権干犯問題を「忘れられた歴史が不肖の後生に教へてくれている」と見做す小堀氏の著書(大日本帝國憲法と統帥権)明治聖徳記念学芸会要覧(復刊一五)は正にその実践であり、筆者はそこに故郷津彦先生同様の志士の存在することの感激を覚えるのである。

自由ヶ丘 調 貞子 身の手は種々敷かれ城壁は融け、強く美しくあり

大島 河野 英子 三十五階の窓より見下ろす 博多湾水鏡に走り下りし づし

赤間 中村 澄子 コクリの紅が群るの草原に 教会の十字架を反す

古式祭のご案内



第四三回 宗像大社歌会詠草 大野 展男 選 毎月末日ノ切

大島 目原 節子 台風の去りて静まる裏山に 法師舞一つはすずみ啼く

第二十五回

西日本菊花大会

内閣総理大臣賞に

盆裁部門 高島 雪茂氏(遠賀郡)



門に分かれ各々非常に厳しい出品基準、審査基準により作品の競技がなされる。審査は毎年大会初日、福岡県農業総合試験場園芸研究所の審査員として作品の優劣を判定し各部門優秀作品に対し大臣賞が一本授けられる。この大会第一位が当年度九州一との認識は菊花製作者仲間では定着しており、別名「菊作り九州ナンバワン決戦大会」と言われている。

第二十五回西日本菊花大会最高位の内閣総理大臣賞は審査員合議により盆裁部門第一位高島雪茂氏に決定した。各賞の受賞者は次の通りである。

内閣総理大臣賞 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

一大神賑行事、西日本菊花大会(主催・宗像大社菊花会、後援・福岡県他)も、二十五日を迎え、十一月一日より二日迄の期間、当大社境内特設会場において盛大に開催されている。本大会に当り、十月二十一日には、福岡・佐賀・長崎・大分・宮崎・鹿児島・北九州・遠賀・宗像各地の協賛会社より提供されたトラック六十数台で、九州、山口各県の菊花愛好家が丹精込めて菊花三〇〇〇鉢の大輪・懸崖・盆裁・補助・創作花壇等各種色の見事な菊花を搬入、宗像青年会議所会員の手にて展示された。展示ハウスを埋め尽くした菊花は、錦秋の陽光

を浴び、深緑の御社頭に輝郁たる香りを漂わせていた。この菊花大会は昭和四十六年宗像大社「昭和の大造営」完成のおり遷宮・遷座祭奉祝大祭の神賑行事として第一回大会を開催した。西日本菊花大会は、昭和四十六年北九州市、筑豊、遠賀、宗像、粕屋地区を中心とする開催以来四十八年福岡市地区、四十九年佐賀県、長崎県、五十年山口県、熊本市、五十二年山口県、そして昨年平成六年より宮崎県、鹿児島県の入会出品が決定、総数三千鉢を上回る菊花の出品があり、九州規模では前例のない大地地区では前例のない全国的に注目を集めている大会である。

出品は大輪、盆裁、懸崖、特別作品、九州山口各県対抗大輪補助特別競技の五部門に分かれ各々非常に厳しい出品基準、審査基準により作品の競技がなされる。審査は毎年大会初日、福岡県農業総合試験場園芸研究所の審査員として作品の優劣を判定し各部門優秀作品に対し大臣賞が一本授けられる。この大会第一位が当年度九州一との認識は菊花製作者仲間では定着しており、別名「菊作り九州ナンバワン決戦大会」と言われている。

第二十五回西日本菊花大会最高位の内閣総理大臣賞は審査員合議により盆裁部門第一位高島雪茂氏に決定した。各賞の受賞者は次の通りである。

内閣総理大臣賞 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町 盆裁部門 高島水産大臣賞 農林水産大臣賞 盆裁部門 高島 雪茂 遠賀郡遠賀町

力(小倉南区) 石田御年(粕屋郡) 末次勝記(若松区) 九州花卉御売市場 連合会々々長賞 大保弘信(直方市) 大徳正義(福岡市) 石原陸男(都市) 福岡市(宗像市) 福岡県農業協同組合 中央会々々長賞

福岡県観光連盟会々々長賞 中尾利雪(小倉南区) 穴井利之(直方市) 大保弘信(直方市) 高山包夫(宗像市) 福岡県農林事務所々々長賞 久保文義(直方市) 下村連(遠賀郡) 石田俊延(粕屋郡) 寺下政国(鳥栖市) 福岡商工会議所賞 高山 勉(三井郡) 九州旅客鉄道株賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

中国調査紀行(1)

楽 忞 子

一誌一話(47) せる様に、この附近一帯には考古遺物が山をなすように散ばっている。漢代の黒灰の堅く焼き締まった陶器の大形の破片、また所々に小さな丸くて赤・青・緑・黄・紺など色彩やかなガラス小玉が散乱して落ちている。我々もこの中で漢代の特徴をよく表している土器の口縁部や底部、文様がある胴部の破片やガラス小玉等を参考資料として表採し、持ち帰らせてもらった。携りには関連のないと思いつつ帰途に、帰路は往きとは異なる道を通る。この道の近くは延々と城壁が伸び連なっている。天気も回復に向い薄日が射してくる。十六時頃レンガ造りの四角形の塔らしき物が道路脇に見えてくる。車を停めて下りる。これは干しレンガを積み上げて築いた宗像の塔火である。漢代の長城の所々にはやが積み重ねる大地を飛び跳ねるように走り、ようやく目的の地「玉門関」に十五時三十分に着き、やれやれ砂漠で迷ったこと約五時間、遠く所々にレンガ造りの城壁が水と続いてみえている砂漠の中に、朽ち果てた巨大な四角な楼門(城門)がある。これはレンガ造りである。これは小川よりもう一段深く、垂れ籠めた薄暮の中に辿り着いた玉門関であった。玉門関は西域へと通づる所である。ここは漢朝では最西端の地であり、砂漠の中にいる軍事基地である。今はその古姿をほとんどとどめていない。城壁は多くの人々で賑わっていたことを思い出す。

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞

福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞 福岡県農林会々々長賞



### 宗像大社歌会 俳句作品集(三九)

福間 森 清  
秋雨や犬も老母も寝るばかり

福岡中央 力丸 玄風  
静けさは限りあるもの木の  
実落る

日の里 花田いつ枝  
日翳れば膝より冷ゆる車橋

自由ヶ丘 細川 絹子  
流れつく先に山あり秋の雲

若松 高橋 忠實  
地鳥や古碑に秋草からまり

藤沢 井上 玄洋  
川覗き居並ぶ堤の泡立草



## (続) 沢の寄物

### パプアニューギニアの旅(三)

102



着陸、儀式がはじまる

ラエのスーパーマーケットには日用雑貨類から、生鮮食料品まで、何でも揃っている。玩具や野や山で使う道具まである。大部分は

東南アジア・中国・オーストラリア製品であった。日本製品は日用雑貨類は気がつかない。玩具や野や山で使う道具はほとんど日本製だった。

街の中心の処々には、物売り、道路にも観光客を相手にの石器や木彫類を並べたり、神妙な顔をして鉄籠に入ったクスクス・ワラビーの皮類もあつた。

土産用の弓矢を売っているものにも出会った。それもこれも、メマシアンセンターに行けば購入できると思つて通り過ぎたのだ。センターは休みだといふことで、結局は案内はされなかつた。

街が急に騒然としてきた。泥棒が泥棒を追つたときには、道路の陰に身を隠した。警官にとり押さえられて一件落着くの間、街全体が興奮状態となつて恐ろしくなつた。また歩いていく途中、キャプトル場もあつて、その横

た。訪問の御座にマツトがいるとか、その他もものものが要求され購入し、それらは先発隊が運ぶという。計画や約束は一日で破られ、その都度、お金を要求された。ここまでを要された。このまですれ、もう人間同様、これから先が思いやられる。その夜は明日のこともあ

り早く眠りに付いた。早朝起床、食事をして旧飛行場に到着。昨日休憩したところが見え、飛行場付近の椰子林には高射砲の残骸が放置されてい

た。今夏五十年前に出版されたニューギニアの戦い

では、昭和十八年(一九四三)頃に撮影された写真が掲げられているが日本軍機の残骸がさらされていた。(戦争については後日記述することにした)。

あたりには大勢の人がたむろして、ここも興奮状態。危険な道を迂回した。結局、目的地は二カ所共、うやむやにとどまり、街中を歩いたことになり、一日は過ぎた。スーパーで、ピスケットや缶詰、ビールを買つて宿泊へ。夜は昨夜と同じように一族達が集まり御飯も出て、買った缶詰を詰まらして、夕食をした。フ

訪問のおおきさんの家の訪問も、ヘリコプターが予約されて、結局これで明日早朝出発することになる。訪問の御座にマツト

がいてるか、その他もものものが要求され購入し、それらは先発隊が運ぶという。計画や約束は一日で破られ、その都度、お金を要求された。このまですれ、もう人間同様、これから先が思いやられる。その夜は明日のこともあ

り早く眠りに付いた。早朝起床、食事をして旧飛行場に到着。昨日休憩したところが見え、飛行場付近の椰子林には高射砲の残骸が放置されてい

た。今夏五十年前に出版されたニューギニアの戦い

では、昭和十八年(一九四三)頃に撮影された写真が掲げられているが日本軍機の残骸がさらされていた。(戦争については後日記述することにした)。

あたりには大勢の人がたむろして、ここも興奮状態。危険な道を迂回した。結局、目的地は二カ所共、うやむやにとどまり、街中を歩いたことになり、一日は過ぎた。スーパーで、ピスケットや缶詰、ビールを買つて宿泊へ。夜は昨夜と同じように一族達が集まり御飯も出て、買った缶詰を詰まらして、夕食をした。フ

訪問のおおきさんの家の訪問も、ヘリコプターが予約されて、結局これで明日早朝出発することになる。訪問の御座にマツト

がいてるか、その他もものものが要求され購入し、それらは先発隊が運ぶという。計画や約束は一日で破られ、その都度、お金を要求された。このまですれ、もう人間同様、これから先が思いやられる。その夜は明日のこともあ

### 宗像むかしばなし

## 中津宮 一夜三日祭

秋のとりいれも終わった旧暦十一月一日になると、この大島の農家の人達揃つて中津宮に集まり、その日から三日間参籠をする。今年も十一月二十三日の勤王感謝の日から二十五日まで大島村の庄屋であった大島弥一郎重高の遺徳を偲ぶためと呼ばれて、すでに二百年以上も続けられている行事である。

話は今から二百五十余年、前江戸時代の中頃にさか

のほる。八代將軍吉宗の治下、享保十七年は大飢饉の年であった。所謂享保の飢饉と呼ばれるものである。前年の冬以来気候が不順で、五、六月頃まで長雨が続き、気温もまた低かつたので、作の兆候が現れていたが、加えて伊勢、近江以西の西日本一帯にイナゴの大群が発生し、一夜のうちに稲穂を万石を食い尽すという猛獣とあるに、遂に大凶作の年となつてしまつた。飢民は幕藩領七万人、諸藩約一九九万人にのぼり、筑前国内

に於いても当時の人口の四分の一にあたる人々が飢えに苦しみがきながら死んでいった。宗像郡内とこの島の災は免れず、殊に大島は田畑が少なく日常米麦等の糧食はその大半を他村に依存していたが、この大飢饉で他村からの救援を絶たれ、その弊はより悲惨であつた。島内安直屋に残る過去帳に「享保十八年の年、死者は享年の約三倍に達しているが、この数字からもこの年の惨事の一端が窺われる。

時の大島の庄屋、大島弥一郎重高は、この惨状を見るにしのびず自家の畜養はもとより、日常の費用を減らして飢え苦しむ村人に分かち与えた。これによつて死を免れた人も少なくあつた。幸い翌年は平年作に戻り飢饉の苦しみが免れることは出来たが、この一年の大凶作の捕手は大きく、村は疲弊し人々は困窮に喘いでいた。

しかし、こうした村内の窮状にはお構ひなしに藩庁の租税の取り立ては厳しかった。到底、村に租税負担の力のないことをみた大島庄屋は、再三藩庁に減税の願を述べた。しかし藩の役人は一向に聞きとどけてくれない。遂に意を決した庄屋は半身藩庁に赴き直訴に

を飛んでいるようだが山の中に点々と切り拓いたようなところには、茶褐色の高床式住居が見える。中央部あたりには焼畑が見られ、その近くには焼畑が見られ、それがかなり広範囲になつている。山岳地帯の縄文時代の住居も、このような状態で生活を行っていたのではないかと推察される。この形式の住居は、隣との間は分り比較的近いところもあつた。二山よりあたりを越えたとこもあつた。

山は深なり、それと共にヘリの高度も次第に高くなつていく。気温も低くなり、乱気流に巻き込まれたらひとたまりもないであろう状況である。山を越えるという連絡がある。着陸高度を下げはじめ、やがてゲラウンの部落が見えはじめた。

部落は五、六十棟くらいはあつた。部落の周りに白い原住民の家も見え、都府の周辺はプレハブ式の簡易住居が普及しつつある(時代の波である)。次第に高度を上げて山間部に入ると、高度はまだ五、六メートルから千メートルくらい及んだ。封建の世では直訴は御法度であり、敢えてこれをなす者は厳罰に処せられたが、それを覚悟の上で藩主への直訴を遂げた。租税の減せんことを訴え、出たのである。庄屋は捕らえられて獄に繋がる身となつた。万一の徳報を期待した村人も庄屋控訴の報に暗然とした。父も仰ぐ庄屋の身を案じて人々は歎き悲しんだ。そして今は御神助を仰ぐほかに利益を追い、彼自身だけの利益を消し、は頼みないという弊に陥りがちな現代の風潮にあつて、一身を投げうって村人の危難を救った庄屋の身を案じて、途に神に祈つた村人の心情を偲ぶが、現代であるが故により意義深いものであるといえよう。



(19)



半島半露天の祭祀  
五号祭場は五号遺跡である。五号遺跡は三個の巨岩により、北側・東側・南側と空濠を持つ社がある。祭場はつまり祭場を構成している谷間の岩石に作られていて、谷の水が参道としてつづくところだ。登つていくと、空濠の上の四号・五号・六号・七号・八号祭場と岩を對象とした祭場が続いている。